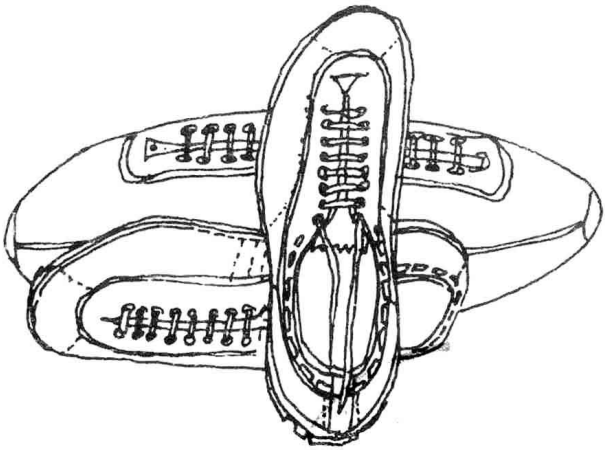
青春とはなんだ

石原慎太郎



青春とはなんだ

石原慎太郎

講談社版

青春とはなんだ

定価　三八〇円
昭和四十年二月十六日　第一刷発行
著者　石原慎太郎（いしはら・しんたろう）
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽町三ノ一九
電話　東京（九四二）一一一一（大代表）
振替　東京三九三〇
印刷所　東洋印刷株式会社
製本所　大製製本株式会社

著者の了解により検印廃止。
乱丁本・落丁本はおとりかえいたします。
©石原慎太郎　一九六五

青春とはなんだ・目次

降りた男……七
夜……一四
路上……一九
新学期……二八
下宿……五九
香月……七〇
若い草……七九
青空教室……九四
放課後……一〇四
情勢……一〇九
グラウンド……一一九
噂……一三〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

来訪者……一三八
職員会議……一六七
糾弾……一九七
証言……二三〇
他校訪問……二三九
反撃……二四八
会談……二六一
PTA総会……二七一
再来……二八六
和解……三〇二
決戦……三〇八

装幀

岩沢一郎

青春とはなんだ

降りた男

列車はゆっくり動き出し、ホームのすぐ向こうの小さな鉄橋に残響を轟かせながら、やがてその橙色の尾燈も闇の中に薄れて消えていった。

山吉老人は帽子を脱ぐと脇にかかえ、うっすらふきだした額の汗を拭いながら、ホームの事務室に向かって歩き出した。

今年の春は遅く、近くの山の上にはまだ雪が残っていたが、それでもこの二三日は急に生暖かく草の芽や木の芽もにわかに延び上がり、息をし出したようだ。

十時を廻ったばかりだが、今出ていった下りが終列車で、この後夜行の急行が二本無人のホームを通りすぎていくだけだ。

山吉老人が助役として、半分骨を埋めるつもりでこの町にやって来た頃は、いつになったらここにも急行が止まるだろうかと思ったりしたが、何年かたち、彼自身が駅長に昇進して、すっかり町に居ついた今でも、通りすぎる急行の数こそふえたが、この町の駅に止まる急行は、一本も有りはしなかった。

その間町が全く開けなかった訳でもない。隣りの町の外れに、幾つか出来た大工場のおこぼれで、町にも少しは景気はついた。しかし町の連中は、便の少ない鉄道よりも、駅から少し離れた国道を通うバスの方を便利にしているようだ。

ホームには向かいの空地から伝わって草や木の芽のいきりがかすかに匂った。その中から、昼前見た菫の匂いを嗅ぎわけようとするように、山吉老人は立ち止まって見た。

数少ない乗客の改札を終えて、出札係りは木戸を閉じ、事務室へ入っていく。山吉はいつもの癖で、事務室るへ入前、確かめるようにホームを見渡して見る。後は急行が通り過ぎるだけのこの駅に、もう何も誰も残っている筈はなかった。

が、下りのホームの上手を眺めた時、山吉はまだ誰か人の影がそこにあるのに気づいた。ホームの係り員はとっくに中へ入った筈だ。

小さな火が見える。誰かが柵にもたれて、煙草を吸っているようだ。降りた客にしては、馬鹿にのんびりしている。山吉は帽子を、開いた窓のさんに置くと、ホームの奥へ歩き出した。

初め離れたところから見た時、外国人かと思った。小高い柵の上に肘をつき、外を眺めながら、彼は煙草を吸って

いる。背が高いというより、縦も横も並よりはふた廻りほども大きい。
山吉が近づいても男は知らぬ気に、ひどくうまそうに煙草をふかしていた。
「もしもし」
言われてやっとふり返る。
まだ三十前の若い男だ。薄暗がりの中でも、眉と瞳の色が濃いのがわかった。
無札か乗り越しを、人の居なくなった隙に、柵を乗り越えて逃げようとでも思っているのかも知れない。
しかし、それにしては、男は足元に大きなトランクを二つも置いている。尤もこの男なら、トランク二つくらいあってもこの柵は越しただろう。
「あんた、ここで何をしているのかね」
「僕かい、僕はご覧の通り煙草を吸ってる。悪かったかな、列車の中が禁煙だったからな」
「悪かないが、早くホームを出てくれないと困る。今いったのが終列車だからな。後を仕舞う都合がある」
「あそうか、そいつあ悪かった」
男は素直に頷くと、煙草をくわえたまま体をかがめ、軽そうな手つきでトランクを持ち上げた。
歩き出す前、もう一度柵越しに駅前の広場を眺める。
言葉になまりの無いところから見ると、この町の人間ではない。他所ものが、わざわざこんな大きなトランクを下げて、何をしにやって来たのかと山吉は思った。
それを裏書きするように、煙草をくわえたまま、くいと顎をしゃくると、
「どんな町かね、ここあ」
「どんなと言うと」
「住み良さそうかな」
「この町へ、住みに来たのかね」
「ああ」
「いいか悪いか、ま、人の好みだろう」
言いながら、嘘をつけ、と山吉は自分で思った。
こんな町が、他所から来た人間に住みいい訳はない。急行も止まらぬ、周りから殆ど閉じこめられたような、盛んといえば人の噂ばかりで、住んでいる人間たちの頭は古くさく、当人たちは自らを他の何と比べることもなく、それでいいと信じ切っている。それを何かで咎める人間がいれば、その咎は必ず倍になって返って来る。
そんな町だ。
周りの町の繁栄の波がこの町にも少しは景気をつけたといってもそのために町が得たものと、喪ったものを比べれば喪ったものの方がはるかに多かった。
時々町の空気にやり切れぬ一部の若いものたちの、手のつけられない逸脱狼藉が、町全体をかき廻すことがある。そしてそれに向かって町中がただびっくりして手をこまぬいているだけで、何も出来ずにいる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いやな町だよ、と喉まで出かかるのを、見も知らぬ他所ものの前で、山吉はやっとこらえた。

「で、あんた、この町で何をするのかね」

男は歩きながらふり返ると、肩をすくめてにやっと笑っただけだった。

「ところで親父さん、どこか顔を洗う水道はないかな。あの汽車旅で、すすと挨りだらけになっちまった。非道えものだ。今の日本でもあんなぼろ臭い汽車が走ってるんだからな」

山吉自身そう思ってはいるが、この見知らぬ若ものからそう言われると、にわかに腹がたった。

「しかし、時間通りにはついたろう」

「ああ、そう言やそうだ。そうでもなきゃ取り柄がねえ。親父さん、どこかに水道は」

「わしは親父さんじゃない。わしはここの駅長の山吉だ」

「ああ、そうか、どうも失礼」

男はひどく素直に、頭を下げた。

「僕あ、野々村って言うんだ。野々村健介」

暗闇の中で白い歯を見せて笑った。山吉は相手の素性のつかめぬまま、むっつりした顔で頷き返した。

着ているものはぼろではないが、決して立派ではない。毛の襟のついた布の分厚いジャンパーに、灰色のズボン、十三文もありそうな頑丈な靴だ。

体つきから言えば工員、というより肉体労働者で、それならば降りるべき駅は一つか二つ前のような気がする。しかし、白い歯を見せて笑った彼の顔だちの印象は、そんな職業とも違って見えた。

改札口まで来、

「切符を持っているかね」

疑ったように訊いた山吉へ、

「はい」

ジャンパーのポケットから握るようにして出した。切符の出発地は東京だ。

改札口の明りの下に来て気づいたが、野々村の下げた大きなトランクは、古いが外国製だった。それに蓋一面に色とりどりの外国のラベルが貼ってある。だが、そのラベルの色も褪せていた。

「ホームの手洗いにも水道はあるが、余りきれいじゃない。こっちへ来なさい」

山吉は先にたって事務室を抜け、裏手の宿直の職員用の野天の洗面所へ連れていった。

ジャンパーを外ずして、顔を洗い出したが、すぐに山吉の見ている前で、シャツを脱ぐと、半分裸になり、体を拭き出した。

暖かいとはいえ、他目には少々寒そうだが、威勢よく体を拭いていく。薄暗い灯りの下に、ついたてみたいな胸と背が見えた。握った手拭を胸や肩にそって動かす度、黒びかりした固い筋肉が、音をたててふるえるようだ。

手拭いを洗おうと彼が水道にかがみ込んだ時、山吉はぎょっとして見直した。
左の肩の後ろ側に凄い傷の跡があった。戦争での傷かと思ったが、この年頃の男が戦争にいっていた訳がない。それに傷は真新しくはないが、そんなに古くもなかった。
鉄砲の弾と刃物と一緒に使ったような、肉が切れてはじけたひどい傷だ。
見つめている山吉に気づかぬように、彼は気持ち良さそうに体を拭きつづけている。注意して見ると、右の眼の上側にも、これは間違いなく刃物で負うた大きな傷跡があった。
最近、近くの他の町の工場の建設や何かでこの町にまで流れ込んで来て、そんな体の傷を見せびらかすように無頼を働く手合いのことを、山吉はすぐに思い出した。
近頃ではそんな手合いを集めた、縄張り云々といったものが、この町にも出来ているそうだ。この男が、もしそうした連中の繋がりでやって来たのだとしたら、傷の具合からして仲間の内では相当な奴かも知れない。
男の背中の傷を眺めながら、山吉は固唾を飲んだ。もしそうとしたら、この男もまた町にろくなものを持ち込む男ではないだろう。
「ああいい気持だ。お陰でさっぱりした。出来りゃ頭から水をかぶりたいくらいのもんだ」
ふり返ると、彼は歯を見せて笑いながら、山吉老人に向かって裸の胸を張って見せた。筋肉のもり上がった、固く分厚い胸板だ。しかし見返す山吉には、彼が笑顔の中で見せる白い歯並びより、丁度真上の明りのせいで、新しくはっきりと見えた、右の眉の上の向こう傷の方が気になった。
顔から右の腕へ眼をそらせながら、
「大きな傷だね、どうしたのかね」
努めてそれとないように訊ねて見た。
「ああ、これか。はゝゝ」
言った後、声を出して彼は笑う。
「みんな想い出があるよ」
それ切りだった。とればどんな風にもとれる。
シャツを着直し、ジャンパーを肩にかけると、
「親父さん、いや駅長さん、竹村って人を知らないかな。この町のどこに住んでるか、竹村澄夫って言うんだけれど」
「竹村？　知らないな。何をしてるのかね」
「町の高等学校の先生をしてる、いや、してたんだ。病気で止めた」
「あんたは、そんな人を訪ねていくのかね」
「そうだよ」
彼は頷いたが、山吉には意外だった。
「それなら、学校で訊いて見るのが一番いい」
「今からいってかね」
「今夜その人を探すのかい」
「ああ、そうじゃないと寝るところがない。俺は駅のベン

チでもいいけれど、親父さん、いや駅長さんが迷惑だろう」
「そりゃそうだ。それなら学校へ電話して訊いてみたらどうだ。誰かいるだろう。宿直か、小使か、誰か」
山吉は事務室の中の電話を指した。
事務室に入ると、男が来る時に通路に置いたトランクが邪魔で、出札係が横へどけようとしている。が、男が二つ軽々持ち上げたトランクは、実際にはひどく重そうで、出札係一人では持ち上がらず、置いたまま床の上をずらそうとしても動かない。
「あ、どうも」
言いながら男は手を延ばすと、空のボール箱でも持つようにトランクを持ち上げ、横の椅子に置いた。トランクの重みで、古い椅子が軋って大きく歪んでしまう。
電話の相手が出た。夜、電話線が閑なのか、相手の声が横にいる山吉老人にもよく聞こえる、
男が用件を言うと、小使らしい声が引っ込んだ。間を置いて、違う声が出た。前よりももっと大きな声だ。耳が痛いのか、男は顔をしかめて受話器を離した。
「なんだ、なんの用事だって」
少し酔ってるみたいな呂律の声が、また言った。
声に向かって男は丁寧な口つきで、さっきと同じ用件をくり返した。
「竹村、竹村の居所だって、知らないな」
「しかし最近までそこで先生をしていたんでしょう」
「ああ、しかしもう、辞めたよ。辞めた人間がどこにいるかまでは知らないな。一体お前は誰だ」
山吉の見ている前で、男の左眉からこめかみにかけての傷が、ぴりりと震えた。男は受話器を耳から離すと、確かめるようにそれをじっと眺めた。
「僕は野々村健介。あんたは一体誰です」
「野々村、野々村だと」
「そうだ。あんたは誰だ」
「俺は教頭の勝又だ。勝又亀造だ」
怒鳴るみたいな声が、山吉にまで伝わって響いた。
問い質すように、男は山吉をふり返る。山吉は男へ首をふって見せた。山吉は勝又の噂をよく知っている。
「余りかまわん方がいいよ」
小声で言った山吉を見返すと、男は受話器を持ち直し、
「誰だか知らんが、あんたは電話のかけ方を知らねえな」
「何だと。お前は一体誰だ」
「だから、野々村健介だ」
「野々村？　聞いたような気がするな」
「よく覚えといてもらおう」
男が受話器をおこうとした時、
「あ、野々村、思い出した。なんだ、貴様、今度来る教師だな、竹村の紹介で」
「来るんじゃない。僕は来た。しかし何だろうとあんたか

ら電話でいきなりお前呼ばわりされる人間じゃない」
「何だと」
「何だとじゃない。あんたは少し飲んでいるようだな」
「それがどうした」
「ま、いいだろう」
「まいいとは何だ」
「だから今夜は許して上げる」
「許すだとお。新米の教師のくせに」
「まだ教師じゃない。この町と学校と、それにじかに見てあんたが気に入りゃそうもなるがね、ま明日ゆっくり会いましょう」
言うと、なだめるような手つきでゆっくり受話器を置く。山吉老人をふり返ると、
「なかなか面白そうな町じゃないか」
「あんた、あんた今教師と言ったね」
「そう。そのつもりで来たがね」
「へえ」
「どうかしたかい」
「いや、それが本当とすりゃ」
「なんだ」
「いや、一寸、そうは見えないね」
「そうだろう。俺だってそうは思ってない。今まで教師なんぞしたこともない」
「何を教えるのかね」
「一応、英語という約束だが、席が空いてりゃ体操も教えるかな」
「体操」
山吉はもう一度男を見直した。英語というよりは体操の方が全然似合った感じだ。
「と、ところであんた、今出た、勝又という男が何だか知っているのかね」
「ああ、教頭だろう。自分ではそう言ったが」
「そりゃそうだが、その他に」
「知らんね」
「明日、うまくやらんと面倒なことになるよ」
「ほう、何かありそうだな、うかがっておこう」
「いや、詳しくは知らんが、みんなんであんな男が、あの学校の教頭で入ったかわからん。いや、よくわかっている。自分の力でそうなった。力ずくで教育委員に推させてだな、以前、町の農工会会長をしていた。ある事件で、背任行為を責められそうになると、潔白のような顔で辞任しちゃあ見せたが、暫くしてどんなつもりか、空いた教頭の椅子に自分を強引に売り込んだ」
「ほう、それで」
「いや、それだけだが、つまり、余りさからってもらわん方がいい人間だ。どこの町にも、いろんな人間がいるだろう」
「誰もが、この野郎と思っているが、道で会えばこっちから頭を下げなきゃならんような人間のことかね」

「とにかく、余計な忠告かも知らんが、学校の先生で来たのならあの男にはあまりさからわん方がいい」
「さからうなということは、こいつと思っても黙って頭を下げていろということかね」
彼は逆に試すような眼で山吉を見た。
「ま、そういうことだな」
「なるほど、それならあなたの言う通りそいつあ余計な忠告だな」
嘯く、というよりあっさりと彼は言ってのけた。言われて山吉はむっとはしたが、何故か本気で腹をたてられない。
「どうもありがとう。それじゃ」
言って立上がったが、
「ああ、チッキで別に送った荷物があるんだ。ついでに今出してもらえるかな」
ポケットから引き換えの紙きれをとり出す。
小荷物室に野々村と書いたコンテナーがひとつ届いている。札を外すし持ち上げようとしたがもの凄く重い。
「ああ、僕が出す」
言って入って来ると、山吉の手ではびくとも動かなかったコンテナーを外側にかかったロープに手をかけ片腕で背負い上げた。
そのまま出て来ると、外に置いてあったトランクのひとつを空いた片腕の脇にはさみ、もうひとつを手で下げた。
横でさっきトランクを動かせずにいた出札係が驚いた顔で見上げるのへ、
「どうもお世話になりました」
ひょいと頭を下げて歩き出す。
「大丈夫かね。この先の通りまでいけば、或いはタクシーが止まっているかも知れない。呼んで来ちゃどうだ」
「いや面倒だ、そこまで歩いていきます。あ、駅長さん、それからどこかここらで飯を食って一寸酒の飲めるところはないかな。腹もすいたし、喉も渇いた」
「そうだな。もう遅いが、県道の交叉までいけば、飲み屋は開いてるだろう。何か食えるよ」
「嶋野屋がまだ開いてるんじゃないですか」
横で出札係が言った。
「嶋野屋ね」
「ああ、あまり柄はよくないが」
言った山吉を気にせず、
「じゃどうも」
踵を返すと、のっしのっしというより、三つ合わせれば悠に自分の体重を越しそうな荷物を手に、すたすたと出ていく。後から見ると、車こそ使わないが、一寸した引越し荷物だ。
「なんです、ありゃ」
たまげた顔で言う出札係に、
「今度来た、学校の先生だそうだ」

「先生、学校の。へえ、俺あまた土方の監督か何かかと思った」

夜

時計の針は十時を廻りやがて半をさそうとしている。樋口道代は怖ろしいものを眺めるようにその針を見上げていた。

先刻十時を打った時計の音を道代は怖ろしい宣告を聞くような気持ちで聞いた。それから今まで、それがただ自分の思い過しであることを彼女は必死に自分に向かって言い聞かせつづけて来た。

時計はもうじき半を打って告げるだろう。それが鳴ってしまえば、自分がどう思ってももう何もかもとり返しがつかないような気がしてならない。

針がすすんでいくにつれ、先刻十時前、店を閉める時使いからの帰りで店先を通りすぎていった遠縁の染物屋の内儀のお良が言った言葉が不安に彼女の胸をしめつけて来る。

お良はついさっき道で娘の育子に会ったと言った。

「ちょっと見ない間にすっかり大人っぽくなったねえ。昔のあんたによく似て奇麗になった」

「おかしいわね。お友だちの家へ勉強の相談にいくと言って出たのに」

「そりゃそうなんだろうよ。でもあの年頃になりゃ、勉強のほかにしたいことだっていろいろあるさ」

お良はかばうように言った。その口ぶりが一層道代を不安にさせた。

「誰と、誰と一緒だったのかしら」

「さあ、二人切りだったよ」

お良の口ぶりでは今夜育子が一緒にいた友だちは道代が思っていたように同性ではなかったようだ。

家を出ていく時の育子の口ぶりではそうだった。道代はうっかりそれを質さずに彼女を送り出した。

娘にだまされた、と道代は思った。が腹をたてる前に彼女はにわかに不安だった。

「どこで、あの子を見たんです」

「そう、公園山の上り口の手前だったかしら」

尚顔色を変える道代を逆に咎めるように、

「大丈夫よ。しっかりしてるわよ、育ちゃんは。それにあんたがそんなに気を病むのは可笑しいじゃないか」

皮肉とも慰めともつかずお良は笑って見せる。

道代には彼女がそう言う意味がよくわかる。この町にいる人間たちの中で、昔道代に起こった出来事についてお良は誰よりもよく知っている一人だ。そして以前のその出来事について、年上のお良は何かにつけ道代の味方にもなってくれた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com